

明治三十六年

(二月)

一月一日 己丑 木曜 四方拝。晴。あたゝかし。

朝五時起。万端仕度して四方拝。家内生徒一同食堂にて雑煮を祝ふ。畢而第六教室にて君か代三唱す。天皇、皇后、皇太子、同妃、皇孫殿下、我校、及校長、生徒の万歳を唱ふ。余、六十四年の年を迎え、心の長閑さ清々しき、めてたき極也。家内及生徒一同を拉して、氷川神社に参詣して帰る。本年ハ生徒の越年三十人也。

受方摘要 吉田石子、五円。植竹政子、五円。

一月二日 庚寅 金曜 晴。あたゝかし。

余、本日も昨日の如く、一同食堂にて雑煮を祝ふ。午下十一時より御礼廻りをする。田村、戸田氏、岩倉氏え行。小松宮様ニ詣し、殿下拝謁申上、宮様と御二度の会食仰付られ、有難き事也。三条家より閑院宮様、北白川宮様、五軒町にて帰。当日ハ来客も殊の外多く、夜もかるた客にて、九時済。

受方摘要 三条家、五円、(氏名欠)、五円。

*かるた(カルタ)

一月三日 辛卯 土曜 晴。

朝より続々来客あり。午下三時より、余、三井得右衛門松囃子に招かる。庭中にて、木曜会員一同の撮影あり。畢而、

囃子 清廉 老松 高信 東北

清廉 高砂 婦人 草紙洗 素謡

各十五段物尽、独吟、独太鼓、一調一笛。

余、八時半帰。

弘方摘要 雑用、一円五十銭。

一月四日 壬辰 日曜 晴。四十五度、寒甚し。

来客、石山基則。美濃遠藤より守口百本入着。

受方摘要 武井作、二円。

弘方摘要 雑用費、三円五十銭。

一月五日 癸巳 月曜 晴。

来客、大炊御門家政、姉小路基遂。

一月六日 甲午 火曜 陰。嚴寒、珍らしくあられふる。生徒等、霰をうけておもしろし。又雨もふる。午下、晴わたるたり。

寒ノ入。

素謡初会。観世清廉、橋岡。

羽衣 忠子 熊野 花 巴 桃子

田村 すま子 祝言

畢而夕飯済て、種々の遊びに、皆々八時帰。

受方摘要 斎藤梅子、五円。

弘方摘要 観世氏、三円。はし岡氏、二円。

*あられ(霰) *晴わたる(晴わたり) *はし岡氏(橋岡氏)

一月七日 乙未 水曜 晴。

人日。七草の粥を祝ふ、如例。

一月八日 丙申 木曜 晴。夜来の風甚し。午下風もやみ、暖かくて有かたき事也。

始業式執行。生徒は午下一時出校。一時半より第六教場ニ於、教員着席、及生徒一同君か代唱ふ。校長、勅語朗読。畢、須川氏、鼠ノはなし有。次ニ生徒校歌、次ニ老年より二年、三年、四年、五年、六年と順次ニ唱歌。畢而六年より遊戯、五級迄順々に。済、三時半余興持寄福引、四時畢。来会者百八十人余也。来賓、毛利式子、大村梅子、石山吉子、大炊晨子、其外。

受方摘要 来栖兩人、十円。

一月九日 丁酉 金曜 晴、夜九時頃より雨ふり出し、夜通し雨はげし。

授業始を成す。当年ハ格外ニ生徒揃来。来客、観世勝、葉室後室、別府静子、玉枝。京都

錦織隆子、吉田滝子、封金着。

受方摘要 錦織、吉田、二円五十銭。

一月十日 戊戌 土曜 晴。

朝、散歩して帰。来客、浜貞子。大坂辻八千より鯛味噌着。山形県西村山郡谷地町上松政太郎依頼絹本梅林山水、梅竹ノ二葉、乃郵便ニて差出す。報恩寺阪東大宣より鶏卵一箱。

受方摘要 田中光、作、三円。

一月十一日 己亥 日曜 晴。

午下より約の如く伊皿子三井氏二行、謡初。夜九時帰。来客、角田栄子。

受方摘要 小野久和、五円。小泉竹子、三円。

一月十二日 庚子 月曜 晴。

来客、安田暉子、千代子、岩佐千賀枝、近藤たか子。余、四時頃より酒井家え約の如く参る。夏子様と御庭逍遙する。月清く鏡の如し。あらたに温室造られて、夏の花ものうつくしく咲たり。つゝし白赤なく数枝いたゞく。夕餐を饗せられ、夜に入て帰。伊豆蓮台寺森林子より手織の一楽一反、ぎんなん着。

*つゝし(躑躅)

一月十三日 辛丑 火曜 晴。

来客、北里虎子。小包物郵送する、遠藤義為、青木久衛、小野経竜、跡見法城、吉田滝子、錦織隆子、大聖寺、水薬師寺、美尾野、寺田善左衛門、田中三五郎、辻八千。

一月十四日 壬寅 水曜 晴、月鏡の如し。

書を寄す、地方十六軒。正子、里方年礼に行。

一月十五日 癸卯 木曜 晴。

(コノ日、記事ナシ)

一月十六日 甲辰 金曜 陰。

午下より御所良子様御局え御年始に参る。如嘉義、祝酒御間のもの等いたゞき、御咄し申上る。皇后宮より御文庫の内、御文房具、硯屏、御文慎、御花文慎、御筆泉、御水入、御香合、御好織御机懸等、御自から御文庫に御取揃被遊候て、私え賜りたり。実に何と冥加に余りし御事やらむと咸涙を流し候。又御菓子等も戴、有かたき事也。四時過帰る。本派本願寺光尊師薨去なるよし。驚二入たり。昨暮二度も親しく御咄しも申上たるに、残念至極也。

*如嘉義(如嘉儀) *御文慎(御文鎮) *御花文慎(御花文鎮) *御筆泉(御筆洗)

*咸涙(感涙)

一月十七日 乙巳 土曜 雨、午下雨ふり出し、夜豪雨。

来客、鳥尾千世子。青木いく恵、醍醐わか、帰塾。石山すま子、一宿。余、夜能を見而帰。甚た寒し。

弘方摘要 能場代、一円八十銭。

*醍醐わか(醍醐あか)

一月十八日 丙午 日曜 晴。

余、正子、桃子と観世に能楽を見る。合同演奏会。他流交りの能也。夕景帰る。

弘方摘要 能箋敷代、三円五十銭。弁当代、九十銭。

*箋敷(棧敷)

一月十九日 丁未 月曜 雨、終日降通したり。終夜降しきる。

陸中関一郎氏より小包にて、するめ、つくはね着。

*陸中(越中)

一月二十日 戊申 火曜 雨。

越中関一郎氏え小包にて菓子、岐阜後藤陽子え小包もの出す。静岡森林子え袋もの、帶止、小包。良子さまえ文庫御重返却す。

一月二十一日 己酉 水曜 晴。

来客、呉琴子、瀬川久珂子、森家田島、安井久子母。

一月二十二日 庚戌 木曜 晴。

来客、関屋愛子、田島春子、岡崎忠子、小西庸子。絹本春夜山水揮毫する。

一月二十三日 辛亥 金曜 晴。

来客、古谷朝子、酒井夏子、松平軺子、小藤芳子。この朝起見れば、坐敷の小松宮殿下の額面いかなれは落てあり。また、余の夢にもあやしと思ふ夢見たり。いつれ思ひあはさるゝ事もやありなむ。

一月二十四日 壬子 土曜 晴。

午下より、余、桃子と観世婦人会二行。晡時帰。

弘方摘要 観世え二円五十銭。同会費、一円ツゝ。

一月二十五日 癸丑 日曜 晴。

朝九日より娯楽会演奏はしまる。余、午下早々北白川宮様え参る。貞宮様御結婚来月六日と御治定二付、御祝ものさし上る。松魚一箱、白紋羽二重箱入。貞宮様二拝謁し致し、しはらく御はなし申上て下る。帰途、三井得右衛門氏にくやみ申て帰。

*朝九日(朝九時) *拝謁(し(ママ)) *くやみ(悔み)

一月二十六日 甲寅 月曜 雨。

終日雨降り通したり。小松宮様御違例を聞て、とくに御見舞に出つへきを、雨にていまたえ参らず。

*出つへき(出づへき) *いまた(未だ)

一月二十七日 乙卯 火曜 雨。
来客、山内節子。

一月二十八日 丙辰 水曜 雨。終日雨降し通したり。少し雪ふりかゝりて、又雨になる。
(コノ日、記事ナシ)

*雨降(し)(ママ)

一月二十九日 丁巳 木曜 旧一月元日。晴。

有約、午下六時より花月楼に行く。角田いよ子、斎藤政子と結婚の式を挙げられて、則同時
親戚一同を招きて宴会執行なり。十一時帰。

受方摘要 博文館、三円。

*斎藤政子(斎藤政吉)

一月三十日 戊午 金曜 孝明天皇祭。晴。

朝十時より橋場小松宮御別邸を伺ふ。御息所様ニ拝謁して、宮様を御病気をうかゝふ。御
はか／＼しうも在らせ給はぬよし、御心かゝりなる御趣。御二度戴て、御暇申上、三条信
受院さまを御尋問申上、久々にて長く御咄し申上て、四時帰る。

受方摘要 三条様、一円五十銭。

*宮様を(宮様の)

一月三十一日 己未 土曜 雪。

朝より雪ちら／＼ふりかゝる。追々とふかくなりて、夜ニ入ては五寸位にもつもり、寒中
の初雪嬉しと庭の面をなかめ、珍らしくもうつくし。夜通しふりつく。

*つもり(積り)

(二月)

二月一日 庚申 日曜 晴。

朝また雪ふりたり。ほとなく晴れたり。九時より観世に能を見る。余、桃子、正子と也。
五時帰る。

二月二日 辛酉 月曜 晴。

受方摘要 津久居氏潤筆、廿円。

二月三日 壬戌 火曜 雪。
昨夜より雪積る事七、八寸に及び、その景色、実絶景なり。終日雪降通し、夜に入ても、尚増々ふる。塾通学生とも、雪打にて大さわき也。

二月四日 癸亥 水曜 晴、月、昼の如し。
きのふの雪はこゝ十年來の深雪にて、屋根の雪おとし見事也。

二月五日 甲子 木曜 晴。

二月六日 乙丑 金曜 晴。

課業二時間畢る。十一時より北白川宮に詣し、貞子女王有馬伯との御結婚二付、御打着の御装束を召されたる所、実にけたかく美しくと拝したり。御行列の御立派也。御息所御はしめ、各女王殿下にも拝謁して、御祝御膳いたゞきて、二時過帰。来客（以下、記述ナシ）

弘方摘要 車夫え三（円）十錢。

*御打着（桂）

二月七日 丙寅 土曜 晴。

（コノ日、記事ナシ）

二月八日 丁卯 日曜 雨。

（コノ日、記事ナシ）

（二月九日、記載ナシ）

二月十日 己巳 火曜 晴。

来客、来栖貞子。

二月十一日 庚午 水曜 晴、はしめて暖気を覚ゆ。

来客、横浜渡辺康子、左右田静子。

二月十二日 辛未 木曜 晴、午下雨になる。

来客、安井久子 同母と退校の御札に来る、呉琴子、江副静子 塾入する。
安井氏、八丈一反。

二月十三日 壬申 金曜 晴。

早起。雨戸明て驚たり。さく雪にて積る事二寸計、未た去る三日の雪、軒にうつ高く残りたるに、又々白皚々、可賞款。午下、空も晴わたりて、契りたる事にて、閑院宮様え参り、御息所拝謁申上る。恭宮様、予の学校え御入学被遊度よし御頼みに相成。御直に御返答も申上兼て、帰宅後相談いたしてとて下る。帰りて相談いたしたる処、校長御預り申上る(と言ふ事にいたして、御答申上たり。

*明て(開て) *「さく(ママ)」雪 *うつ高く(堆く) *賞款(賞翫)

二月十四日 癸酉 土曜 晴。

来客、林里子、幽香子御年始に訪はる。浦四三子より台湾にて看護婦慈善会出品の画頼まれて、生徒廿名に絹地横物揮毫いたさせ、落製する。

二月十五日 甲戌 日曜 晴。

終日揮毫ものする。浦四三子、厨子より生徒の画取に来る。わたし候。諏訪氏、常子、娘連て訪はる。

*厨子(逗子) *わたし(渡し)

二月十六日 乙亥 月曜 陰。

朝、新聞に小松宮御危篤とありて驚入。午下二時より同御殿二伺候する。御門前の困雜一方ならず、漸参りて伺ふ。御息所様にも拝謁いたし、昨夜御こと切にも相成たるに、又々御もち直しの御様子、しかし御昏睡にて、たゞ御いびきのみ。早速御側え参りて伺ひたれ共、かなしきかな御答えとでもなく、涙のみにて恐れ入たる事共也。外御息所様かたにも、昨夜より御通しにて、一先還御あらせられたり。四時過る頃、私も御いと間申上たり。来客、塩原松子。書至、久岡麻子。御枕へにて、

おもひかへしかへしてもなほかなしきはけふのこの日の君かうへかな

今一言聞かせ給へといのれとも出るいきのみの君いかにせむ

受方摘要 塩原松子、五円。

*困雜(混雜) *いと間(暇)

二月十七日 丙子 火曜 晴。

(コノ日、記事ナシ)

二月十八日 丁丑 水曜 晴、午下曇り、雪ちらくする。

午前四時、小松宮御大切の御しらせありて、五時直に橋場御殿ニ参る。三時、御事きれあらせられたるよし。今更なから涙のみ。九時御出門にて御本殿え移らせられる御準備にて、御暇乞をも申上、御馬車に乗せ参らせて、御息所御供にて御帰殿相成る。御いたましさの

限りなり。御跡の人々もたゞなく音のみなり。つゝひておのれも帰る。

*御事きれ(御事切れ) *つゝひて(続いて)

(二月十九日、記載ナシ)

二月二十日 己卯 金曜 晴。

課業畢る。二時半より小松宮へ詣し、御棺前に奉仕し、御通夜す。今夜迄御奥二成らせられる各皇族、御息所様方ハ夜十時迄にて還御なる。

二月二十一日 庚辰 土曜 晴。

朝七時、迎ひの車にて帰宅す。今夜御入棺式にて、表え成らせられる。

二月二十二日 辛巳 日曜 晴。

来客、松平岳子、田中光子母。

二月二十三日 壬午 月曜 晴、少し風アリ。

午下早々閑院宮へ詣す。願道二接し、有かたき事也。日暮帰宅。

弘方摘要 訓解二冊、一円。

二月二十四日 癸未 火曜 晴。五十度、暖し。

(コノ日、記事ナシ)

二月二十五日 甲申 水曜 晴。六十度過たり、暖かし。

課業畢る。三時過より小松宮に詣し、御靈前に参拝し、御息所様にも拝謁して、夕景去る。

この時岩倉氏に寄り、榎子殿一昨廿三日死去ニ付、弔詞を伸て帰る。

二月二十六日 乙酉 木曜

朝八時より、余、挙家一同引連て江戸川車やに到る。小松宮殿下の御葬式御行列ハ一切徒歩にて、御息所御始め、御女儀ハ御先廻り馬車にて、九時前より御馬車引つゝき拝見す。

御柩は十一時半過江戸川御通りにて、実に御いたましさ限りなく、されとも未曾有の御盛なる御葬送なり。人々の拝観する者も、又前代未聞也。豊島岡御着、神饌供したる時、雨少し降り出して、また晴れたり。余等一時頃車にて帰るも、途中雑沓にて進む事能はず、
困雑いふへからず。

*困雑(混雑)

二月二十七日 丙戌 金曜 晴。

午前課業畢る。十時より豊島岡ニテ故小松宮御十日祭御祭典ニ参拝す。十一時御祭典始り、十二時済せられる。
受方摘要 博文館、三円。

二月二十八日 丁亥 土曜 陰。
来客、松野とね子、石山すま子、原氏使小池清。
払方摘要 下婢藤え五十銭。

(三月)

三月一日 戊子 日曜 陰、夜雨甚し。
朝墓参し帰る。終日作図にいと間なし。来客、吉田いつ子、小西常子。書至、関一郎、小包物着。

受方摘要 吉田逸子、五円。
*いと間(暇)

三月二日 己丑 月曜 晴。
朝、散歩して帰。課業午前之分畢る。来客、治、初御暇乞ニ来る、伊藤幸子。余、午下一時より浅草本願寺に於テ小松宮御追悼会法事執行ニ付、同御息所、北白川富君様、かね君、いと君、伏見宮、閑院宮、梨本宮、清栖、御参詣ニ相成たり。余も参詣して後、惣集会の相談して、四時頃帰宅す。
受方摘要 田中静、五円。

三月三日 庚寅 火曜 晴。
払方摘要 篆刻料十六箇、廿七円五十銭。鏡台、五円。

三月四日 辛卯 水曜 朝より雨、午下晴たり、夜に入て又雨ふり出したり。
午下二時課業畢る。五軒町に行。本日ハ初子、清水連郎氏と結婚ニ付、見立に行。三時半ニ出かける。余ハ已而帰。

三月五日 壬辰 木曜 晴。七十二度、暖甚し。
午下五時より観世夜能ニ行。清廉蟬丸ニ、わき宝生新、シテ木下。実に空前絶後の能にて、感に堪たり。見所も大入にて場所なし。大盛會也。来客、伊藤幸子。

払方摘要 夜能見料、一円八十銭。
*わき(ワキ)

三月六日 癸巳 金曜 晴（ハレ）。四十二度ニ下ル。
京都水薬師寺より、そら豆着、文も。房州万里小路直房、男子出産ニ付、産衣料五円を贈る。

三月七日 甲午 土曜 晴。

来客、江副静子俄に渡米致し候ニ付暇乞に来る、十日出帆のはつ也、神田徳子。余、午下一時より観世稻荷祭り乱能ニ行、夜七時帰。静子え餞別として縮緬縫模様の肩懸を贈る。
弘方摘要 観世稻荷え二円。

*はつ（筈）

三月八日 乙未 日曜 陰、陰晴さたまらず。

朝十時半より閑院宮様え参り、種々御咄し申上て、五時過帰る。

（三月九日〜十四日、記載ナシ）

三月十五日 壬寅 日曜 雨、終日ふり通したり。

午下一時より校友会特別会員相談会を開く。朝より雨なれと、一時より続々集る。小早川、大村、五島、山本、斎藤、島田、山根、志賀、松野、南条、横浜渡辺玉、長松、清水初、廿人余。夜九時迄も咄し合たり。総会ハ四月十三日月曜と治定す。来客、清水連郎夫婦始而来る。

三月十六日 癸卯 月曜 雨、終日ふり通したり。

（コノ日、記事ナシ）

三月十七日 甲辰 火曜 雨、終日雨ふ（り）たり。

来客、大森清子伯母、清子寄宿を頼に来る。

三月十八日 乙巳 水曜 晴。

午下四時より小松宮様え伺ひ、御息所様、今宵はゆる〜咄して遊ひくれと仰せられ、御靈前にて種々御咄し申上て、十時帰。今般御抱ニ相成たる表の人にて、もと京都にての門人田村喜三郎に逢ふ。昔語りする、珍らしき事也。

三月十九日 丙午 木曜 晴。

烹方教場新築地行にかゝる。来客、福井茂子退校ニ付、其伯母なる人と来る。一宿、西崎久美子明日支那え出立ニ付、暇乞に来る。

福井氏、青梅縞一反。西崎、高砂染一反。

*地形(地形)

三月二十日 丁未 金曜 雨、朝より雨降しきる。
午下三時より三井得右衛門氏え行。素謡会。夜九時帰。

三月二十一日 戊申 土曜 雨、終日ふり通したり。
(コノ日、記事ナシ)

三月二十二日 己酉 日曜 晴、夜よりかけて大雨又雪、朝十時頃より空晴わたりたり。
春季皇霊祭日。朝より神前清払して先祖祭執行。生徒一同えすもしを出す。愛国婦人大会、
九段階行社ニテ執行。閑院宮妃殿下、総裁御承諾ニ付、成らせられる。空も晴わたりて大
盛会也。来客、呉琴子、小山氏。
*階行社(偕行社)

三月二十三日 庚戌 月曜 晴。
(コノ日、記事ナシ)

三月二十四日 辛亥 火曜 雨。
昨夜より雨よく降くらしたり。試験全畢、式ノ習礼する。
受方摘要 酒井氏、五円。

三月二十五日 壬子 水曜 晴。
休業。生徒も帰省するものもあり、残りたるも有り。

三月二十六日 癸丑 木曜 晴。
有約、本町清水氏え行。午下三時より、余、桃子、始めての客、雛祭にて招かれ、両親は
しめ連郎弟妹にも逢ふ。五軒町治、いくも、神田徳子、琴子も来られる。大くもてなし
にて、夜九時帰。

*いく(幾)

三月二十七日 甲寅 金曜 晴。
(コノ日、記事ナシ)

三月二十八日 乙卯 土曜 晴。
朝九時より本郷女子美術学校卒業式ニ行。畢而帰途、玉翠館ニ撮影して帰。来客、清水母、

初子、石川君子、三条家より津田千世、葉室氏、織原節子父。長尾収一、数子、雄、久々にて面会す。雄児発育も早く、物事よく分り、末たのもしく見えたり。一宿す。此度、姫路地方え栄転ニ付、暇乞に来る。清水氏より、大島一反。

三月二十九日 丙辰 日曜 曇、朝少し小雨ふる、已而晴。
長尾夫婦、小児共十時過帰。

余、昨夜の夢に、三島小松宮御別邸にて御庭の散歩中、此時は故宮様の薨去なりし御跡とて、御園中も何となく淋しけにて、たゞ感にうたれて、秋せきばくとして、御裏御門に郵便箱あり、この箱の中に、いかにも染なしたるもみちの六、七枚もは入たり。これを御息所え持てさし上て、珍らし事とて哥よまざるへからすとて、

ふみならて秋の便りをしらすは風の入れしかこの紅葉を
ととみて夢醒る。

*せきばく(寂寞) *もみち(紅葉) *は入たり(這たり) *とみて(よみて)

三月三十日 丁巳 月曜 晴。

(コノ日、記事ナシ)

三月三十一日 戊午 火曜 雨。

明日の準備にいそかはし。来客、大塚伝三郎。橋岡、京都より帰り来る。

受方摘要 博文館、三円。

(四月)

四月一日 己未 水曜 晴。朝、又カ雨降る。已テ止。十時頃空全晴わたり実到天晴朗、風もなく天のたまもの也。

卒業証書授与式執行。午前十一時より生徒参集す。一時より式執行す。卒業生六十二名。式畢而、須川氏、服部氏、宮内氏演舌アリ。四時迄ニ全畢、卒業生一同庭中に撮影す。生徒一同箱入菓子を出す。教員、卒業生ニは菓子及すもしを出す。園中花始而開。

四月二日 庚申 木曜 雨。

来客、大塚伝三郎春子退校の御礼に来る、春子帰国す、阿部艶子父。入塾、筑原数江、同兄、安齋勝子父、八木米子。

四月三日 辛酉 金曜 晴。

深川堀田伯より招かれて行。久々にて珍らしき御談話等もあり。夜九時帰。
受方摘要 堀田氏より五円。
弘方摘要 堀田御次え三円。

四月四日 壬戌 土曜
来客、酒井忠醇、藤子、卒業の御礼に来られる。
受方摘要 酒井氏、一円廿五銭。

四月五日 癸亥 日曜 晴。
観世会二行、五時帰。江戸川の花、五部咲出たり。

*五部(五分)

四月六日 甲子 月曜 晴。
授業始執行す。新入学生続々来る。

四月七日 乙丑 火曜 晴。
課業畢る。午下より宮城え参る。藤袴様、今般御先着供奉仰せ付られる二に付、御暇乞に参る。五時帰。此記事九日の分。
課業畢る。余、桃子と江戸川の花を見る。八部の盛り至極見頃なり。中の橋の雑沓限りなし。橋の上には巡查制してたゝすませず、兩岸の人、川の舟人夥たゝし。五軒町え寄て、休足して帰。月清光。

*仰せ付られる二に(衍) *八部(八分)

四月八日 丙寅 水曜 晴。
小松宮御五十日祭ニ成らせられる二に付、葵町御殿え参る。九時、御祭式に参拝して、夕景帰る。

*成らせられる二に(衍)

四月九日 丁卯 木曜 雨。
七日の記事ハこゝに入る。

宮城え参る。竹橋御門よりの御庭の花満開にて、殊にまた何となく奇麗にて、行もえやらず感にうたれたり。わか園中の花満開、ちりもはしめず。余が誕生日の祝のしるしに、すもしこしらへて、生徒一同楼上にて花見の宴を催す。志賀氏来られて談話あり。

*行もえやらず(行も得やらず) *ちり(散り) *こしらへて(拵へて)

四月十日 戊辰 金曜 晴。この日より花ちりかゝる。

来客、多田操治、小泉竹子、母と。終日客のつゞきにていそかし。典侍良子様より電話にて、今日四時三十分汽車にて京都御出発のよしにて、則新橋へ行、花松典侍、藤袴典侍、吉田鈺子、生源寺、大東、其外にて御一行三十人計。御先着也。先々御きけんよく御見立申て帰る。
受方摘要 小泉竹子、十円。

四月十一日 己巳 土曜 雨。正午頃より雨ふり出し、夜二入ても大雨、又晴、月出たり。
(コノ日、記事ナシ)

四月十二日 庚午 日曜 晴、風甚。

朝、植物園の花を観る。風に散くる花の雪、桜か雪か白妙の、この庭神下り立た、(衍)せたる趣也。春の色にあくかれてけり。已而帰。来客、新井好子の妹入塾ニ付父も来る、青木幾重、小池清。あしたの準備ていそかはし。訃音、大坂長谷川一彦十日死去。直二弔詞出す。今朝、大坂唯専寺、原氏え書を寄す。

受方摘要 新井氏、三円。

*下り立た(衍)せたる

四月十三日 辛未 月曜 晴。

校友会大会。原町酒井伯邸をかり請、朝来準備。園中池をへたて、茶亭を設ル。そばや、御団子や、あま酒や、らむねや、しん子や、おすしや、みかんや、せんへいや、軍楽隊、手品師、寒山の席焼、落語や。園中ハ各国の国旗と球灯にて、桜花のちりくるさまかくやくたり。午下一時より来賓続々入来る。会長式詞をのふ。思ひ／＼に散歩しつゝ、茶や入てたのしきけふの一日や。集るもの四百人の余也。空は珍らしき申分なき天気にて、散会したるハ五時也。余、帰宅後旅装して、七時四十分の汽車にて横浜原氏へ行、一宿する。供にはそのを連る。

*らむね(ラムネ) *しん子(糝粉) *せんへい(煎餅) *かくやく(赫躍) *
たのしき(楽しき) *その(園)

四月十四日 壬申 火曜 晴。

朝七時平沼発汽車に乗る。原氏ハ富太郎、善一郎、春子、太三郎、同勢十一人、午後七時四十分名古屋ホテルに着。一泊。東京え電報ウツ。明日ハ余等ハ直ニ京都ニ趣クはづ、原氏の一行ハ奈良え向テ行つもりと決定す。この汽車の雑沓ハ実に言語に絶たり。

*名古屋(名古屋) *趣ク(赴く)

四月十五日 癸酉 水曜 雨。

十二時廿分静岡発汽車、名古屋一時発にて出立、京都近万え電報にて知らせる。清洲、一

ノ宮、木曾川と廿三停車場を過て、京都着五時四十分。木田長治郎迎ひに来る。木田氏家内一同喜ひ迎へる。一宿。この汽車ハ存外雑沓もなく静かて安心也。
*名古屋(名古屋)

四月十六日 甲戌 木曜 雨。

昼飯早々御寺の御所え参る。主職慈栄さま、瑩堂、独峰、其外一同大喜ひにて、直に車にて御所え参る。良子様、寿子様、吉田様、藪様にも御目にかゝる。皇族さまかたの御参内御場所等拝見する。すへて元の御所ハ又かく別有かたく、昔恋しく思はれ候。夫より清浄華院え墓参する。雨の中、御墓四十余ヶ所御華を奉る。母の墓にも参而、また御寺の御所え帰る。一同、ひと夜も泊りて咄し共したくと一宿する。夜と共に種々昔し咄しに一時頃迄。

*主職(住職)

四月十七日 乙亥 金曜 晴。

朝より、この御所の種々御宝物もの拝見する。十時、暇乞して木田氏に帰る。直に岡崎古美術会二行、古式のもの縦覧して、若王子、永観、南禅寺、粟田青蓮院宝物拝見して、祇園、清水え行。清水見物して木田氏え帰る。夜、都躍を見る。実に奇麗也。

四月十八日 丙子 土曜 晴。

朝、木田氏誥別して京都臨時汽車九時四十分二乗。車中知人多くして、はなしの内大坂え着。跡見法城迎ひに来る。直二唯専寺え行、久々に一同対面、願泉寺えも行。院主及家内一同二逢ひて、昔しもの語りする。此夕、博覧会電汽を見る。実に爽快。未たかゝる盛んなるを見ず。快と呼ぶ。帰寺す。

*電汽(電気)

四月十九日 丁丑 日曜 晴。

午下、博覧会を見る。美術館のみにて、雑沓極まりなし。とても親しくハ観る事出来ず。天王寺一心寺但末女案内にて、楼上より博覧会の全景を見る。夫より茶臼山に相對したる雲水に行て、不茶喫しなから、舟すへりを見る。愉快極なし。夫より小松宮御たんとにて成たる大つり鐘を見て帰。朝よりも木津の人々訪問不絶、夜も同しく一時位迄咄したり。この朝、木津土神え参詣す。

*不茶(普茶) *御たんと(御檀度)

四月二十日 戊寅 月曜 晴。

博覧会開会式。天皇陛下御臨幸成。天下茶やより田中三五郎迎ひに来る。余、春江、園連て、今宮より汽車にて天下茶や寺田氏え行。善左衛門、三五郎、芽木花、桜井氏も同道に

て堺水属館二行。人の群集にて、漸の事にて見畢。昼をはと場料理店にて喫し、浜寺二行。老松樹林にて風色先大坂第一とす。立派なる料理店アリ。暫時この景色を見て、一同芽木氏に帰り、一泊す。

*天下茶や(天下茶屋) *天下茶や(天下茶屋) *水属館(水族館) *はと場(波止場)

四月二十一日 己卯 火曜 晴。

朝飯済て帰寺す。終日来訪者に逢ふ。木津有士者より歓迎の為、明日小学校え集会する事となる。

*有士者(有志者)

四月二十二日 庚辰 水曜

朝九時、小学校え参集する。生徒一同君か代を奏しつゝ、余を迎ふ。余、一同二面会して演説する。畢而校長長々し演舌あり。一同え饅頭を贈る。この会する者一千五百人也と云。十二時畢而帰る。

(四月二十三日〜三十日、記載ナシ)

(五月)

五月一日 己丑 金曜

課業にかゝる。

五月二日 庚寅 土曜 晴。

課業如例。来客、石山すま子、大炊御門氏、弘。すま子一宿。

五月三日 辛卯 日曜 晴。

赤堀峰翁八十八の祝宴を開、園遊会催し候二付、補習生不残日本橋俱樂部に行。愛治郎、菊江も。朝十時より、余、すま子と観世会二行、五時帰。赤堀峰翁え白竜門一反を祝ふ。

*日本橋俱樂部(日本橋俱樂部)

五月四日 壬辰 月曜 雨、午下五時頃より雨、夜通しふる。

来客、吉村滋子、補習科二入学す。

五月五日 癸巳 火曜 晴。

朝大雨、暫時にして晴たり。故中村敬子一周祭二付、**さか木**料金千疋を備る。

手向にと水枝さしたる榊葉にこもる涙をうけませよ君

午下三時より三井得右衛門氏へ行。素謡会。十五会之祝二付、雲雀山を謡ふ。景物、小サキ足袋めされましくハ御心そとよ、巻煙艸入二煙草二本かくて烟もたえくの、籠にくた物を入れて実や昔も君のため、三種を出す。夜八時帰。

*さか木(榊) *備る(供る)

五月六日 甲午 水曜 晴。

記事なし。夢の記事。この日夜中に床のあたりにて強き音したるに、**夢醒**て、何の音かと**かく別に案**しもせて、また寐に就く。朝起て、(翌日に続ク)

五月七日 乙未 木曜 晴。

朝起て見れば、床の間四、五寸丸程の石落たり。天上一間破れてあり。**天上**に石のあるのもあやしく、是また何の兆そや。来客、温田氏、茂木氏使せん女、松平岳子絹本揮毫に入らせられたり。

弘方摘要 訓解四冊、二円。

*夢醒て(夢醒て) *かく別(格別) *案し(案じ) *天上(天井)

五月八日 丙申 金曜 曇、夜雨甚し。

来客、温田母。夕景より、余、菊枝と同道にて、本郷薬師植木買二行。俄に雨ふり出して、終日は内より車迎ひに來りて帰る。

五月九日 丁酉 土曜 朝晴天にて、正午半頃より雷鳴はけしく、強雨、雹ふり、すさま

しき空也。三時頃空全く晴たり。夜月清し。

(コノ日、記事ナシ)

五月十日 戊戌 日曜 晴。

朝より觀世別会能を見る。

藍染川 清廉

弱法師 清之

撰待 閑雪

道成寺 亮太郎

正尊 清廉

横浜より井上氏、すま子、桃子も連る。此日、房州より姉伯着、直二赤十字え入院也。弘方摘要 能場代、三円五十銭。

五月十一日 己亥 月曜 晴。

記事なし。

五月十二日 庚子 火曜 晴。

午〇字四十九分、姉小路典侍さま京都より御帰り二付、御迎ひに新橋迄行。先々御きけんよく御帰りに相成たり。それより余は赤十字社え姉伯を訪ふ。久々にて拝顔いたしたり。

案するよりも血色も元気もよろしき様見上たり。良暫く御咄して帰る。書至、安田善之助結婚二付十七日紅葉館え招待、木津林治郎右衛門。

*案する(案じる)

五月十三日 辛丑 水曜 晴、夜に入て強雨、終夜ふりつゝく。

下婢そのゝ妹え小包もの出す。午下、塾通学生とも拉して、大塚松平氏別邸に散歩す。園中新緑鬱々蒼々として眺望もよろしく、庭の摘草にて一同大よろこひ、茶菓にておもひ／＼に遊ぶ。暫くして雨ふり出したり。また空もよくてぬれずして皆々帰りぬ。

*その(園) *よくて(好くて) *ぬれず(濡れず)

五月十四日 壬寅 木曜 朝また雨にて、午下やみぬ、曇天なり。

志賀氏来る。安田善之輔氏え結婚祝として、紋織御召箱入、松魚一箱を贈る。

五月十五日 癸卯 金曜 雨。

朝、墓参して帰。

黄金なすゝなの花や青麦の畑こそ春の錦なりけり

五月十六日 甲辰 土曜

有栖川宮よりの画、鯉魚藤花之図一枚落製する。

五月十七日 乙巳 日曜 晴。

朝より有栖川宮御息所より御依頼の鮎に萩の図一枚出来する。午下五時より、余、桃子と、安田氏の招に應じて紅葉館に行。善之輔氏の新婦銚子にも紹介あり。来会者多人数也。九時帰。

五月十八日 丙午 月曜 晴、午下四時頃より雨ふり出したり。五十度。

島地黙雷よりの扇子七本落製する。

五月十九日 丁未 火曜 晴、朝また雨なりしも、午下より晴てあつくなく事。七十五度。

朝より矢師渡辺氏紹介の袋棚襖絹地四季花卉四枚落製する。来客、忠子、すま子、はし岡来り、廿二日の申合せする。忠子、すま子、一宿。

*あつくな(く(ママ))事 *はし岡(橋岡)

五月二十日 戊申 水曜 晴。
泊り客、朝帰らる。小山五兵衛氏の純地柳隄山水揮毫す。

五月二十一日 己酉 木曜 雨。六十度。

来客、山口徳太郎、柳瀬万吉、連子。木津跡見え小包物出す。小山氏の純地白牡丹談彩揮毫する。

柳瀬氏、白紗一反。

*談彩(淡彩)

五月二十二日 庚戌 金曜 晴。

午下二時より觀世に行。婦人素謡会也。余、小原御幸を謡ふ。六時比帰。山口徳太郎依頼の扇子三本揮毫す。

払方摘要 觀世え会費、一円五十錢。

五月二十三日 辛亥 土曜 晴。

午下、閑院宮に詣す。御息所御不在にて、若宮様百日セキにて御違例さま伺ひて帰る。北白川宮様え参り、暫時咄して帰る。

*百日セキ(百日咳)

五月二十四日 壬子 日曜 晴。

終日揮毫する。

五月二十五日 癸丑 月曜 晴。

来客、閑屋愛子。木津唯専寺より手紙及そら豆着。絹本豎物関一郎氏依頼鯉魚河柳之図、案山子之軸、箱書付する。

五月二十六日 甲寅 火曜 晴。午下四時過より空悪しく雨ふり出し、雷鳴すさましく、落雷もありそふなり。

来客、五島善子、有栖川宮様よりの御使ナリ。明廿七日、故小松宮御百ヶ日祭典二付、菊花御紋のからひつに御菓子贈らせられる。来客、串田茂子母、姪の入塾を願出る。書を寄す、木津跡見え、梅野倉子。

白奉書紬一反。

受方摘要 有栖川宮、三十五円。

*からひつ(唐櫃)

五月二十七日 乙卯 水曜 晴。

課業畢る。午後一時に豊島岡小松大将宮御廟祭典ニ参拝す。来客、石山基則、すま子。安部基安妻千代子、去ル廿五日男子出産して已死去のよし、残念の極也。

豊島か岡小松宮のみまつりに蟬のなく声を聞て、

なれもまたこのみまつりの樂の音にあはせて鳴か蟬のもろ声

五月二十八日 丙辰 木曜 地久節。晴。

来客、舟橋了助、石川君子保証人君子退舎願出ル。地久節二付、休業。桃子、栄子、鶴子、君子、万里伯に誘れ穴守稻荷え参り、夜九時帰る。

五月二十九日 丁巳 金曜 晴。

(コノ日、記事ナシ)

五月三十日 戊午 土曜 陰、陰晴定まらず、折々雨ふり又やむ。

来客、渡辺玉子、山田梅子、来栖篤、平田貞子。

湯沢氏、伊勢崎めいせん。渡辺氏、ちゝみ浴衣二反。

*伊勢崎めいせん(伊勢崎銘仙) *ちゝみ浴衣(縮浴衣)

五月三十一日 己未 日曜 陰晴定まらず、折々雨もあり。

終日揮毫す。不順にてけふ迄着す。

払方摘要 橋岡え五円。

*けふ(今日)

(六月)

六月一日 庚申 月曜 晴。

来客、渡辺玉子、同子息和太郎、柴田朝子。書画をよす、備後高木周蔵、宮城今井善雄。

書至、今幾多玄英。はしめて単ふらねるをきる。

*はしめて(始めて) *ふらねる(フラネル) *きる(着る)

六月二日 辛酉 火曜 晴雨定まらず。

朝より絹本一幅揮毫す。午下早々九条様え訪問す。恵子様ニ御尊にて御目かゝり、御産後大く御快気にて、御子様も大きい方にてよき御姫様也。暫時咄して帰る。小松宮様え参り、思ひ寄らさる御遺物、御召御紋附戴く。夫より中山家え訪問して、栄子様、高丸様にも御目二かゝり、謡三番連吟して帰る。

六月三日 壬戌 水曜 晴。七十八度。
(コノ日、記事ナシ)

六月四日 癸亥 木曜 晴、風甚し。

朝四時半より、余、桃子と、車にて日比谷公園開開二付、往て見る。朝より人も大せいで、人道、車道とありて、噴水も二ヶ所、池も二ヶ所、すへて俗に近し。公会にて宜しき場所もあり。梅林、竹林、株柗林、草花園もあり、先々市中にかゝる公園は珍らし。よき遊び場也。七時前帰宅する。志賀氏演舌ある。

受方摘要 博文館、九円。

*日比谷公園開開(日比谷公園開園) *株柗林(棕柗林)

六月五日 甲子 金曜 晴。

来客、橋本宗二郎、菜花画渡す。

六月六日 乙丑 土曜 晴。

有約、午下三時より駿ヶ台神田氏ニ招かる。余、桃子同道にて行、光琳屏風を観る。四季花卉天然の野へのまゝをかきたるなり。縮図する。清水老夫婦も、初子も来而夕食を饗せられる。皆々珍奇物のみにて、心も清々したり。八時過帰る。月も清光にて散歩して帰る。正子、九時頃より産気つきたる様子にて、産婆を呼に遣し、直に兩人共来る。すへて準備もとのひて、今か今かと待たるに、夜明てもまた其模様なし。

弘方摘要 釧解二冊、一円。

*駿ヶ台(駿河台) *野へ(野辺) *釧解(訓解)

六月七日 丙寅 日曜 晴、午下三時頃より雨ふりかゝる。

来客、大森清子の祖母。四年生の禊会催す。正子、朝より度々しきりハ来れとも、午下三時頃には全くいたみもなく常の如しとなる。

*しきりハ(陣痛ハ)

六月八日 丁卯 月曜 晴。

課業畢る。洪や赤十字え姉伯を問ふ。総体はよろしき方なるか、脊づいの水を明日あたり今一度治療致さねはならぬと申されたり。来客、福田よし子。

昼けしてしふやあかさか事をへて帰るもいまた日は高く見ゆ

*洪や(洪谷) *脊づい(脊髄) *昼け(昼餉)

六月九日 戊辰 火曜 晴。

上杉御老母、去ル三日御逝去ニ付、琉子え悔みと御菓子を贈る。この日も正子、今かくといふはかり、ひとくしきり来たりたれともまたやむ。来客、忠子、すま子。

受方摘要 橋本吉衛、十円。

*しきり(陣痛)

六月十日 己巳 水曜 晴。

朝より、すま子も来られたり。先々この日こそと思ふはかりニいたみはけし。度々の事ながら、時々やすみには平常の如し。大く元氣にと、いとふしき也。午下三時頃よりいよくはけしくなりて、夜九時三十分分娩す。玉のやうなる女子にて、一同大く安心す。

六月十一日 庚午 木曜 雨、終日の雨、夜も強雨なりしも、一時頃より晴たり。

久しふりにて雨ふり出て嬉し。産婦、子供ともさはりなし。五軒町重たけ来る。

*重たけ(重威)

六月十二日 辛未 金曜 晴、午下三時頃細雨さつと降てやむ。

田村利久仁病を問ふ。暫時にして帰る。入梅。石神井より早苗子預りのかゝ来る。

*かゝ(嚙)

六月十三日 壬申 土曜 晴、午下六時頃俄然夕たち、直ニやむ。

来客、石山吉子、跡見治、岡崎忠子、片山菊、こま。森林子より生節着。

受方摘要 酒井夏子、五円。

*片山菊(山片菊)

六月十四日 癸酉 日曜 晴。

来客、清水初子、重たけ、いく子、大炊御門晨子。

*重たけ(重威)

六月十五日 甲戌 月曜 晴、午下二時頃より俄然夕立、雷鳴、暫時にしてはれたり。

朝七時、早苗子石神井え里子に遣す。来客、石山基則。書をよす、森林子、小栗栖香頂汲

泉二部郵送ス。

*はれたり(晴れたり)

六月十六日 乙亥 火曜 晴。

尺八寸絹本豎物彩色藤花飛燕之図揮毫す。書をよす、北海道吉田民治え。はしめて蚊帳をつる。

六月十七日 丙子 水曜 晴。

小松宮より御使立川氏来る。大将宮御遺物とあらせられて、古硯一面横二南田揮詩、五峰山人文アリ、蓋朱檀玉ノ飾アリ、外袋切も珍らしきもの也、外箱黒檀、外二瑪瑙金魚文鎮。

六月十八日 丁丑 木曜 晴。

沖繩鳥島噴火。北海道にて卒業す。

六月十九日 戊寅 金曜 晴。七十九度。

来客、岡崎忠子、栄子。

六月二十日 己卯 土曜 陰、午下大雨、夜も降通したり。

(コノ日、記事ナシ)

六月二十一日 庚辰 日曜 晴、天如拭。

(コノ日、記事ナシ)

六月二十二日 辛巳 月曜 午下四時頃より雨ふり出る。

書至、英国ろんとんより江副静子、小栗栖香頂、孫光子。朝、墓参して帰る。

*ろんとん(ロンドン)

六月二十三日 壬午 火曜 晴。

来客、毛利万子、謡三番うたふて御帰りに相成たり。

六月二十四日 癸未 水曜 晴雨定まらず。

午下、余、中村正修氏え歯の療治に行。故敬宇文集七冊一部をわかつた。

六月二十五日 甲申 木曜 晴雨定まらず。

余、俄に寒けたちふるひ出出して、早速に井深氏も来りて薬用もいたし、漸あたくかに成て、先々快。

受方摘要 九条家、千疋。一円五十銭。

*ふるひ(震ひ)

六月二十六日 乙酉 金曜 雨、晴雨定まらず。

姉小路良子様より御使来りて、昨日東宮妃殿下と第二皇孫殿下と御同日の御誕辰にて、世に珍らしき事也。其御祝ひ御膳に上り候。御料理、小戴等も珍らしくいたゞき候。来客、石山すま子、一宿。

弘方摘要 御垣の下草二冊分、二円八十銭。

六月二十七日 丙戌 土曜 雨、陰晴定まらず。

来客、岡崎忠子。書をよす、吉田民治氏え。

受方摘要 吉田石子、十円。

六月二十八日 丁亥 日曜 雨。

午下より三井得右衛門氏に行。素謡会にて、余、水無月祓を謡ふ。夜八時帰。

六月二十九日 戊子 月曜 晴。

(コノ日、記事ナシ)

六月三十日 己丑 火曜 晴。

午下、閑院宮に詣し、御息所様、御子様方、御一統に御目にかゝる。しはらく御咄し申上て去る。小松宮様を伺ふ。御息所橋場に成らせ給ふて、御不在、みつさきに逢て去る。田村氏に利久仁を訪ふ。病かはりなきよし也。

来客、忠子、すま子。

受方摘要 閑院宮、三十円。

(七月)

七月一日 庚寅 水曜 雨、朝より雨にて、午下大風雨となる。朝十時頃、長き地震ある。

来客、横浜原氏使にて井上市兵衛来る。出産の祝もの持参する。紹友仙一反。本日より授業半日となる。

受方摘要 三条家、十円。

弘方摘要 泰え軍艦の酬、五円。

*紹友仙(紹友禅)

七月二日 辛卯 木曜 晴。

来客、すま子、忠子。

七月三日 壬辰 金曜 晴。

観世夜能を見る、午下五時より。

七月四日 癸巳 土曜 陰、午下雨。

愛治郎、豪、石神井村早苗児の里へ行。午下、観世孀音会朝より始るへ行。来客、田中光子、一宿す。

受方摘要 田中光子、五円。

払方摘要 観世え一円。外事務下婢、三円。会費、五十銭。

七月五日 甲午 日曜 雨。

来客、瀬川久賀子、井上秋子、田中光子母、岩佐千賀子、長谷川幸子、橋岡。
受方摘要 今城友子、千疋。岩佐千賀、五円。

七月六日 乙未 月曜 雨、午下雨全く晴たり。月はしめて清く。

井深氏より有松しほり二反。

受方摘要 多田操次、七円。

七月七日 丙申 火曜 雨、夜通し大雨降つゝく。

雨。田村氏より小紋御召一反、旭御めし一反。宮本氏より八千代御めし。

払方摘要 金百円、預ケル。

七月八日 丁酉 水曜 雨。

雨中ながら早苗宮参り祝ひのくばりものする。

*くばりもの(配りもの)

七月九日 戊戌 木曜 雨、暴風雨はけし。

田村利久仁、朝死去。知らせニより早速悔みに行。七時頃俄に変来りて、遂ニ脳貧血にて死去す。いたましさの限り也。来客、大森清子の伯母、中元ニ来る。横浜え中元と早苗の祝もの配らす。

七月十日 己亥 金曜 晴。

横浜より井上市兵衛中元ニ来る。来客、毛利氏よりいく子。

毛利氏、すきや。

*すきや(透綾)

七月十一日 庚子 土曜 晴。

午下早々田村氏二行、利久仁葬式見立ル。已而帰。

受方摘要 松平妙子、五円。白石氏、四円。

払方摘要 反物文庫、三円廿銭。

七月十二日 辛丑 日曜 晴。

来客、田中久右衛門、清水連郎。所々方々中元の配りものす。

受方摘要 田中久子、五円。斎藤梅子、十円。

弘方摘要 姉小路次え五円。

七月十三日 壬寅 月曜 晴、夜に入て雨となる。

午下早々中元に廻る。戸田氏、岩倉、小松宮、九条公、三条公、閑院宮、北白川宮、五軒町え行。日晡帰宅す。

閑院宮、すきや。戸田氏、おめし一反。

受方摘要 戸田氏、七円。三条公、七円五十銭。九条公、二円五十銭。太田房、五円。西村喜三郎、二円。岡本三輪、五円。

*すきや(透綾)

七月十四日 癸卯 火曜 雨。

来客、岩浪稲子。有約、田村利久二初七日退夜二付、夕景参詣する。桃子と同道、晚餐を饗せられる。八時頃帰る。

受方摘要 北白川宮、二円五十銭。

*退夜(逮夜)

七月十五日 甲辰 水曜 雨、朝雨、午下晴たり。

受方摘要 上杉氏、一円。酒井氏、一円廿五銭。松平栄子、二円五十銭。西端初世、一円。

七月十六日 乙巳 木曜 晴。八十五(度)。

朝十時頃より佐野氏を訪ふ。御隠居及おきわさま二も逢ひ、久々にて大悦二候。中村元嘉氏訪ひ、長松幹氏今朝六時死去のよしにて、長松氏に悔みを伸。石山氏及赤十字に姉伯を訪て帰。はしめての暑さにて、実に堪かねたり。森岡澄子、明日結婚の式を挙げられ候よしにて、御礼ニ来る。

森岡、単物地一反。小野氏、浴衣地。

弘方摘要 訓解二冊、一円。

七月十七日 丙午 金曜 晴。八十四(度)。

(コノ日、記事ナシ)

七月十八日 丁未 土曜 晴。八(十)四(度)。

来客、五島善、知子、志賀鉄千代、丹羽花子、お子さまと。

五島氏よりちみ浴衣地。

*ちゝみ浴衣地(縮浴衣地)

七月十九日 戊申 日曜 晴。84(度)。
来客、菊、駒女。
受方摘要 園祥子、三円。

七月二十日 己酉 月曜 晴、雨。84(度)。
割烹日。生徒よりの料理にて、余、及愛治郎、大和田、宮内、服部、西村、桃子馳走になる。
払方摘要 正子え三円。

七月二十一日 庚戌 火曜
土用入。先々あやうき空なから、夜二入て雨降り出したり。

七月二十二日 辛亥 水曜 雨、朝より雨つゝきにて、夜通し大雨ふりつゝく。
来客、修芸社大江孝之。

七月二十三日 壬子 木曜 朝また大雨、十時頃より晴わたりたり。
生徒送別会の準備、昨夜より装飾に余念なし。筆工宮内一来り、二、三の筆詠る。遊戯場中心に大ア、チをこしらへ、それえ紅灯を沢山二つるし、六方柱に杉の葉、八ッ手、或もちの葉にてア、チノ丸に艸花を付、**大りぼん**にて飾り、縦横に数十の紅灯をつるし、立食場を設く。第四教場にて余興種々**趣工**アリ。四時おそば、畢而余興。六時食事、畢而余興、或は遊戯、又割烹場にて拵えたる**中花饅頭**、衛生菓、ラムネ等にて、実に盛会也。生徒の悦ひ言はん方なし。十時畢。

*大りぼん(大リボン) *趣工(趣向) *中花饅頭(中華饅頭)

七月二十四日 癸丑 金曜 晴、午下五時頃雨ふり出したり、夜通し大雨。
如例教授済て、六教場にて生徒一同集り、須川氏演舌、及黒岩氏、余の演舌もありて、唱歌うたふて、一同授業納をなす。来客、石山すま子一宿、小室銀子父銀子退校す。
小室氏より紋上布一反。
払方摘要 泰、弘錢別、十円。

七月二十五日 甲寅 土曜 晴、朝より雨ふりて、正午頃より晴たり。
塾生朝より帰省す。すま子帰る。
茂木氏、白紹一反。

七月二十六日 乙卯 日曜 晴。82 (度)。
来客、浦四三子。塾生大既帰省す。午下早々一番町三井氏歌仙会に行。余、江口。観世も来りて、大々盛也。午下、夕飯食事も済て、七時全畢。後、一調七番済て、八時帰。泰、弘同道にて本所八時之汽車にて旅行出立す。
*大既 (大概)

七月二十七日 丙辰 月曜 晴。82 (度)。
来客、今井猪太郎、石山基則、今井千枝子。

七月二十八日 丁巳 火曜 晴。88 (度)。
朝七時より上野美術協会南画会二行。可観者少し。参校品には尤多し。のどのなる様なる盛麗堂松竹蘭三福縮写す。本日、庭園にて弓術会を催すとて、昨日より準備にいそかし。正午より弓術会二会する人、土井子はしめ廿人計の人来りて、六時頃済。跡、亭主役の人々残りて、日暮皆帰る。来客、石山吉子。
*のと (咽) *なる (鳴る) *三福 (三幅)

七月二十九日 戊午 水曜 晴。
朝より暑中見舞の端書及小包物、京都、大坂、美のえ出す。泰、弘兩人帰宅す。途中にて画絹を落したりとて帰る。

*美の (美濃)
七月三十日 己未 木曜 晴。
姉三位様、退院して久々にて御入あり。当時裏松子に御出ニ相成候。正子、里方え暑中に行、日暮帰宅。

(七月三十一日、記載ナシ)

(八月)

八月一日 辛酉 土曜 晴。
姉三位様、五軒町え御帰殿ニ相成。余等も五軒町え行、御待請いたす。日暮迄種々御咄して帰宅す。愛治郎、泰もうかふ。来客、万里通房殿。
*御待請 (御待受) *うかふ (伺う)

八月二日 壬戌 日曜 雨、夜通し雨ふる。

雨にてすゞしく。朝より裏松千代子訪問せられ、午時石山すま子来られて、午下一時より謡六番をつゞけにうたふ。愛治郎、泰、弘、栄、鶴同行にて、朝四時半出門して房州え行。君子も同様也。

八月三日 癸亥 月曜 晴。71(度)。雨故にかさむく。

朝またぬか雨ながら、已而晴たり。微恙にて臥。

来栖氏よりかたひら一反。

*かさむく(寒く) *ぬか雨(糠雨) *かたひら(帷子)

八月四日 甲子 火曜 晴。88(度)。大暑いみしくて堪かたき事也。夜に入ても風無く、

むしあつきよ也。

朝より齒医渡辺氏え行、奥齒の療治を頼み、かけたる抜とらせたり。本日の吉日を以て、姉小路基遂と松木延子と結婚式を挙げられるに付、桃子朝より出かける。万里小路直房、同智子、媒介を頼みたる。直房病氣二付、代理重威夫婦勤める。方々え暑中の書状出す。
*よ(夜) *かけたる(欠けたる) *挙げ(れ(ママ))る

八月五日 乙丑 水曜 晴。89(度)。午下四時頃、雨さつとふる。しかれども、この暑

さ堪かたき事、昨日の如し。夜も月は清くて、十時頃迄庭に出たれとむし暑熱く、風なく。

朝、裏松氏え暑中見舞に行。姉伯え御悦申上て渡辺齒科医二行、療治してもらひて帰。

*むし暑(熱(衍))く

八月六日 丙寅 木曜 晴。日夜のあつき、ほとく困しはてたり。風もなくむしあつき

日也。98(度)。

姉三位殿、今夕霊岸島迄往れ、この宿にて一泊のはつ也。来客、橋岡明日北海道行にて暇乞に来る、駒も来る。本日も渡辺氏え行。

払方摘要 はし岡え二円。桃子え五円。

*はつ(筈) *はし岡(橋岡)

八月七日 丁卯 金曜 晴。9(度)。風少しもなく、むしあつき。月清し。

桃子、朝四時半出門、房州え行。来客、山崎八重子母、江副熊子、静子。わし田、国元より靖次つれて帰る。この夜十一時頃、石神井よりと迎ひに来る。

江副より支那絹一疋。

受方摘要 安田暉子、三円。

*9(ママ) *わし田(驚田) *と(父)

八月八日 戊辰 土曜 晴。9(度)。昼も夜もすこしも風なく。
朝十時頃より方々え暑中見舞に出かける。四時帰。

*9(ママ)

八月九日 己巳 日曜 晴。91(度)。月清くてらしたれと、風少しもなく、夜をくるし。
朝より虫ぼしする。来客、石山すま子、一泊す。渡辺氏に行。田村氏へ行。月忌二付、仏前に参る。みな仏参にて不在。方々え書を出、十五軒。

*てらし(照らし) *夜を(夜も)

八月十日 庚午 月曜 晴。91(度)。

朝、姉小路基遂殿御夫婦御出にて初対顔する。品位もそなはり奇量も中々美しく立派にて、伯爵夫人として恥かしからぬ方にて安心く致し候。暫時にして帰られる。すま子、朝帰宅す。はし岡、塩かまより書至。書をよす、姉小路典侍さまえ、房州も子えも。姉小路、土産紋羽二重一反。

*奇量(器量) *はし岡(橋岡) *塩かま(塩竈)

八月十一日 辛未 火曜 晴。95(度)。

朝、渡辺氏に行て帰。けさ三時より、今多入谷に行、七草朝貌の盆栽もとめ来られるを、

御仏の果をうけたるか朝貌のるりこん色に咲出にけり

弘方摘要 あんまのかゝえ亭主の病氣二付、三円。

*るりこん色(瑠璃紺色) *かゝ(嚙)

八月十二日 壬申 水曜 晴。94(度)。

書至、木津跡見法城、美尾野氏。書に云、木津鷗橋詰に木津吉の悴徳松事大隅太夫と成て歌舞伎坐興行ニ上東いたし、御ひいきを願ひたしとの事なり。房州も子より書至。

*大(ママ) 隅太夫

八月十三日 癸酉 木曜 晴。はしめて風あり。是や神風或は極楽風とや、有かたき風也。

94(度)。

朝、房州愛治郎より電報アリ云、一番ニテ一時チャク、車五台ムカイ。直に十二時迎車出す。訃音、井深鐘昨夜七時半死去、直に井深氏二行、弔詞を伸ブ。午下四時半、愛治郎、泰、栄、鶴四人、無事帰り来る。先々安心。

弘方摘要 井深香華、五円。

八月十四日 甲戌 金曜 晴。9(度)。

朝六時井深氏葬送、愛治郎代佐伯会葬す。わか居間の畳仕替へにて掃除す。下婢ふぢ宿下

りす。書をよす、六軒え。

*9 (ママ)

八月十五日 乙亥 土曜 晴。92 (度)。
朝より絹本、秋草花を画く。来客、安部基安夫婦。

八月十六日 丙子 日曜 92 (度)。

朝はしめてすゝし。来客、小木曾氏。小隅太夫え白紹箱入一反、金五円を贈ル。右、小木曾氏に托す。

弘方摘要 小隅太夫え五円。

八月十七日 丁丑 月曜 晴。92 (度)。

朝より絹本山水を画く。来客、石山基則、玉枝、立入、田島春子。

八月十八日 戊寅 火曜 晴。9 (度)。

朝少し細雨、已にして晴たり。早起。氷川神社に詣して帰る。もゝ子より電報来る、本日二時着く。車の迎ひを遣す。三時、もゝ子、弘無事着す。余、渡辺氏に行て帰る。田村氏を訪ふ。

*9 (ママ)

八月十九日 己卯 水曜 晴。午下六時頃より雷鳴にて雨降り出し、是や甘露とやいはん。

已而雷も雨も止む。今一しほ雨降りたらはと思ふ程也。92 (度)。

早起。牛天神に詣て帰。朝渡辺氏二行、治療済。来客、安井てつ女。

弘方摘要 渡辺氏、二円。

八月二十日 庚辰 木曜 晴。88 (度)。

早起。白山神社ニ参詣して帰。弘、朝一番汽車四時三十分にて高橋え行。高橋の祖父死去、訃音あり。来客、浦四三子。愛治郎、横浜に行て夜帰。

八月二十一日 辛巳 金曜 晴。85 (度)。

夕景より涼風ふく。ひるのあつさをわする。

早起。三崎稲荷に参詣して帰。夕景より正子と本郷に行て帰。金地屏風にかゝる。

弘方摘要 買物、二円。

八月二十二日 壬午 土曜 晴。85 (度)。

早起。墓参して帰。屏風揮毫す。

八月二十三日 癸未 日曜 晴。 88 (度)。
屏風揮毫す。

八月二十四日 甲申 月曜 晴。 9 (度)。
屏風揮毫す。朝、橋岡来る。昨日北海道より帰る。

*9 (ママ)

八月二十五日 乙酉 火曜 晴。 92 (度)。
夜むしあつくて寐られず。
屏風揮毫す。来客、大村梅子夫人、石山すま子、橋岡氏。

八月二十六日 丙戌 水曜 晴。 92 (度)。

来客、大坂小隅太夫、岡崎忠子、小池清、伊藤とく。午下三時、忠子、すま子帰。

八月二十七日 丁亥 木曜 雨。昨夜より雨にて、けふもふりたれと、大樹の下には雨通
らぬ位也。 82 (度)。

朝より屏風揮毫して、午下米倉秀造の病を問ふ。一平氏、大ゐに喜んで例の軸もの屏風等
観る。夫より田村利久仁の五十日二付、問ふ。夕飯を喫して帰る。

受方摘要 田村氏より十円。

八月二十八日 戊子 金曜 晴。 82 (度)。

奥の大掃除する。余ハ屏風出来する。此夕、西斎藤より梨子数百七ッ着。

八月二十九日 己丑 土曜 晴。 84 (度)。

朝、書をよす、良子さま胃ケイレンにて御なやみのよし、御見舞の文出す、斎藤みや子え。

受方摘要 博文館より十四円。

*胃ケイレン (胃痙攣)

八月三十日 庚寅 日曜 晴。 80 (度)。

(コノ日、記事ナシ)

八月三十一日 辛卯 月曜 晴。午下二度計、雨さつとふる。たちまちにして晴。月殊に
きよし。 85 (度)。

朝より深川堀田伯を問ふ。終日珍らしき御咄し共にて、夕景帰。

払方摘要 堀田御次え三円。

(九月)

九月一日 壬辰 火曜 晴。90 (度)。
朝墓参して帰。

九月二日 癸巳 水曜 二百十日。晴。90 (度)。

朝より閑院宮様を詣し、御両殿下御内にて拝謁仰せ付られ、此度恭宮御入学ニ付、種々御頼み被遊、御昼飯戴て帰。

九月三日 甲午 木曜 晴。月清し。90 (度)。

朝、伊藤光子帰塾、先登第一なり。帰塾、万里小路君。来客、閑院宮御使田尻幹、堀田伴子、浦四三子、品川英子、小池清、姉小路基遂、延子、若旅喜一郎及延子。
若旅氏、白縮緬一反。

受方摘要 堀田氏、五円。

九月四日 乙未 金曜 晴。月殊に清し。92 (度)。

朝より御内儀姉小路良子様の病を問ふ。先々御いたみやみ、熱度一通りにて、きのふより始めて御湯煮のおも湯めし上られ候やうにて、しはらく御咄しも有之、先々安心いたし候。十時過帰。

*をやみ(小止)

九月五日 丙申 土曜 晴。90 (度)。

朝起て揮毫にかゝる。来客、伊藤篤太郎母春子、其娘圭子入学を願出る。愛治郎、横浜より帰、午十二時過。桃子、堀田伯二行。

伊藤氏、なるみ一反。

*なるみ(鳴海)

九月六日 丁酉 日曜 晴。十五夜月殊に清し。92 (度)。

終日揮毫する。来客、武村清蔵妻と娘、安田暉子、同千代子。此夕、多氏横笛持参り、月に対して笛をふく。音もすみわたりて心も清くたのしき夜也。此時、橋本氏も来りて、美術談かたり合て、十時頃去る。

今津氏、白ちゝみ一反。

*白ちゝみ(白縮)

九月七日 戊戌 月曜 晴。84 (度)。

開校、授業始めを執行す。閑院宮恭子女王、御入学あらせられる。朝四時起。

向山氏、甲斐絹一反。

九月八日 己亥 火曜 晴、午下四時頃より雨ふり出したり。やかて晴。月清光。82(度)。朝四時起。午前より青山え行。帰途雨ふり出したり。

弘方摘要 釧解四冊、二円。

*釧解(訓解)

九月九日 庚子 水曜 晴、雨さつと降来りて、やかて晴。88(度)。朝四時起。大家氏、印章を頼み、刻成して持参せらる。刻料三円也。

九月十日 辛丑 木曜 晴。天晴朗、夜八時頃より雨ふり出したり。92(度)。朝、氷川神社に参詣して帰。入塾生二人。

九月十一日 壬寅 金曜 雨。午下四時頃より小雨、夜八時頃より雨になりたり。75(度)。朝三時起。雨ふり出したり。已而やむ。来客、大沢亀子、井上市兵衛醍醐あか退校の御礼ニ来る。

原氏より白絹一反。

受方摘要 田中静子、三円。

九月十二日 癸卯 土曜 二百廿日。朝より小雨、已而やむ。75(度)。朝四時起。

九月十三日 甲辰 日曜 陰。昨夜の大雨、実に金の如し。八月二日小雨より此雨はしめてふり出し、作物すへて実のり結構也。雨乞のしるし見えたり。74(度)。

来客、松木薫子。昨日二百廿日、全国共に風なし。大無事也。

九月十四日 乙巳 月曜 折々小雨ふる。涼気を生ず。

受方摘要 大和田氏、十円。

九月十五日 丙午 火曜 折々小雨ふる。涼甚し。

(コノ日、記事ナシ)

九月十六日 丁未 水曜 晴。

午下、千家、江副氏え行、夕景帰。

九月十七日 戊申 木曜 晴。85(度)。
早起。散歩して帰。午下、新宿石山、大炊両家へ行、夕景帰。

九月十八日 己酉 金曜 晴。91(度)。
早起。散歩して帰。書をよす、千家俊子。

九月十九日 庚戌 土曜 雨。
来客、石山すま子、橋岡氏。

九月二十日 辛亥 日曜 雨。
入塾、松平梅子。同、小布施。

九月二十一日 壬子 月曜 彼岸の入。雨。
来客、折原節子父、島田信子。

九月二十二日 癸丑 火曜 雨。終日小雨ふる。夜半に大雨降通したり。余、三時頃起出
て、豪雨の障りもやと家内見廻りたり。

(コノ日、記事ナシ)

九月二十三日 甲寅 水曜 暴風雨。

昨夜よりの大雨ながら、今朝よりも一層はけしく暴風雨となりて、表裏とも出水にて、昼前より雷鳴もあり、いとおそろしき空也。然れ共、恭宮様はやはり成らせられたり。車夫のものゝあたり迄水にひたす位也。生徒の下り時、車にてはこひ候。裏より表へ出る水のはけしさ、可驚也。未曾有の形況。塾の椽の下迄も水来る。裏の長屋などハ畳迄に至る。夜に入て少しは引気みになりたり。来客、江副廉三。

*椽(縁)

九月二十四日 乙卯 木曜 彼岸中日。晴。

朝より神前掃除して祭典す。生徒一同すもしを饗す、例の如し。秋季皇霊祭ニ付、祖先祭り執行す。

九月二十五日 丙辰 金曜 晴。

来客、閑院宮家令松井氏、恭宮様御稽古拝見ニ来る。

九月二十六日 丁巳 土曜 晴。

午下嬌音会ニ行、日暮帰。

九月二十七日 戊午 日曜 彼岸結願。陰。
観世会二行。桃子と同道。

九月二十八日 己未 月曜 晴。85(度)。
来客、閑院宮家令松井氏。

九月二十九日 庚申 火曜 雨。
来客、閑院宮御使平田氏。恭宮様より白縮緬一疋、御目録十円。

九月三十日 辛酉 水曜 雨。

午下、田中健三郎氏病を問ふ。少々つゝよき方ニ迎はれ、室内歩行出来る様に成らせ候。
閑院宮様え詣し、御息所様にも拝謁、暫時御咄し申上て去。小藤孝行氏を問ふ。夫婦にも逢ひ、暫時咄して帰。

*よき方(好き方) *迎はれ(向はれ) *成ら(せ(ママ))候

(十月)

十月一日 壬戌 木曜 雨。
画を送る、備後和知晚翠氏。

十月二日 癸亥 金曜 強雨。

昨夜来豪雨すさましくふりて、今朝も尚ふりつゝきたり。表裏共、前の廿三日の雨と同じ水にひたしたり。生徒は出校の向も有りたれと、又もて水の高からんを恐れて、直に生徒は帰宅致させ、学校休業す。

*ふりつゝき(降り続)

十月三日 甲子 土曜 陰、月清し。

朝より晴らしく覺えたり。姉小路良子様、新橋十一時三十分汽車にて鎌くら御用邸御転地療養ニ付、御見立を申上る。已而帰。

*鎌くら(鎌倉)

十月四日 乙丑 日曜 晴、月清し。

朝より観世会二行、正子も。

払方摘要 観世場代九、十、十一、十二(ママ)、一月迄、十一円五十銭。

十月五日 丙寅 月曜 晴。朝より晴朗にて、明月には珍らしき月さへ渡りて、三千界照り渡る真如の月を見る。

仲秋明月。来客、江副熊子、跡見玉枝。

*さへ渡り(冴え渡り)

十月六日 丁卯 火曜 晴。

午下早々高輪御殿に参る。久々園基祥、さゝ木夫婦、毛利安子夫人にも逢、面晤して四時去。帰途、千家氏を訪問して御夫婦と談話、暫時にして帰る。横川実子、其父と退校の御礼に来る。

受方摘要 横川氏、五円。

*さゝ木(佐々木)

(十月七日、八日、記載ナシ)

十月九日 庚午 金曜 晴。

書をよす、千家俊子、北白川宮稲子、斎藤仁子、跡見三治郎、山中秀子。書至、江副廉三。弘方摘要 橋岡え五円。

十月十日 辛未 土曜 陰。

午下、中村歯医師へ行、治療を乞て、田村氏へ行。岩倉氏先在、素謡をはしむ。夜七時帰。

十月十一日 壬申 日曜 晴。

生徒点茶会。園中には弓術会、村田氏始十有余人来る。津久居氏より松簞着。

*松簞(松茸)

十月十二日 癸酉 月曜 雨、終日雨ふり通したり。

午下三時より三井得右衛門氏へ行、素謡会。九時帰。

十月十三日 甲戌 火曜 雨、終日ふり通したり。

来客、田村都子、其母と退校の御礼に来る。

田村氏、薄花裏地一反。

十月十四日 乙亥 水曜 雨、午下晴たり。

来客、岡崎忠子、石山すま子。会津中条より松たけ着。

十月十五日 丙子 木曜 晴、晴朗珍ら敷天気。

朝墓参して帰。書をよす、中条みよ子、大聖寺さまえ。明日生徒運動会の準備にいそかし。
弘方摘要 釧解二、一円。

*釧解(訓解)

十月十六日 丁丑 金曜 晴、夜大雨、雷鳴もあり。

朝九時、生徒一同集会、徒歩にて田畑村田村氏の別荘に着。園中に敷物をしきて、相互に遊ひ合ふ。杉苗廻りやら、遊戯籠を高さ処につるして、紅白の鞠を入合ふ。いと面白し。其内弁当をつかひて、又各楽しく遊ぶ、一時過る頃より雨ふり出し、帰り仕度して一同帰路に及び、雨段々降しきりて、途中の車二逢次第、生徒を乗せて返す困雑也。二時、三時迄には一同帰着す。其内雨も小ふりとなる。当年の雨に逢ひたるは、此学校はしめてよりのはしめ也。

*田畑村(田端村) *困雑(混雑) *小ふり(小降り) *はしめて(始めて)

十月十七日 戊寅 土曜 雨。

神嘗祭。此日鎌倉行の筈、雨にて見合せたり。午下、雨も晴たり。

十月十八日 己卯 日曜 晴。

朝四時半より起て、余、愛治郎、栄子と三人連にて、新橋七時四十分汽車にて鎌倉へ行。此時、姉小路基遂御夫婦も同行にて、天は晴朗なり、心地よく汽車中も面白く、九時後に御用邸に参る。良子様も御病後殊の外御機嫌にて、御殿の御模様拝見いたし、御広々として御眺望頗る好風色也。夫より良子様も御同道にて七里ヶ浜辺散歩して、海の詠も珍らしく。突然横浜左右田氏に逢ひたり。愛治郎ハ今日左右田氏に用向有て行つもりなりしか、用事こゝにて済たり。仍而横浜行ハやめたり。奇偶也。また御用邸に帰り、昼餐をいたく。暫時にて大答宮へ参詣する。八幡前にて車にて行。鎌倉の雑沓いはん方なし。稀なる好天気にて競馬も有り、所々見物して帰り、御合のものいたゞきて御暇申上て、四時四十分の汽車にて七時頃新橋着。迎ひの車にて無事帰着す。
弘方摘要 良子様女中え二円。

*奇偶(奇遇) *大答宮(大塔宮)

十月十九日 庚辰 月曜 晴。

今夕泰、長野県地方より帰着。御寺の御所より松茸、くり着。

十月二十日 辛巳 火曜 晴、朝曇り、後晴たり。

正子、朝七時四十分新橋発にて鎌倉に行。弘も朝七時上野発にて修学旅行する。姫路長尾氏より松茸一籠着。直に返書と小包もの出す。

十月二十一日 壬午 水曜 晴。

松平頼聡伯、去ル十八日薨去ニ付、弔詞を伸、御暇乞して帰。金千疋、**備もの**。
*備もの(供もの)

十月二十二日 癸未 木曜 曇、午下三時頃より雨ふり出したり。

来客、報知新聞大林茂樹氏。午下四時半より夜能に行、八時帰。
払方摘要 場代、二円五十銭。

十月二十三日 甲申 金曜 晴。

(コノ日、記事ナシ)

十月二十四日 乙酉 土曜 晴。

朝、千家尊福来る。閑院宮姫宮三方様成らせられる。十一時還御なる。

十月二十五日 丙戌 日曜 晴。

午下早々觀世**白人能**を見る。五時帰。書至、千家尊福。書をよす、江副熊子。**美の青木氏**
より松茸一籠着。

*白人能(素人能) *美の(美濃)

十月二十六日 丁亥 月曜 晴。

書至、江副熊子、米倉千賀子、中浜千代子、松茸一籠着。

十月二十七日 戊子 火曜 雨。

(コノ日、記事ナシ)

十月二十八日 己丑 水曜 雨。

遠州跡見暉一より松茸一籠着。朝、上野六時何分かに、愛治郎、正子、栄、鶴の四人連にて日光觀楓に行。

十月二十九日 庚寅 木曜 晴。

午下二時より素謡会を催す。来客、中山栄子、福田芳子、岡崎忠子、石山すま子、橋岡氏。三時前よりはしまる。

柏 崎 忠子 わきすま子

雲雀山 すま子 同栄子

花かたみ 栄子 同芳子 ツレ花

定家 芳子 同花

晚餐中入済て、

山 姥 栄子 わき芳子 ツレ花

富士太鼓 同すま子 ツレ忠子 (シテ記述ナシ)

九時一同帰られる。石山基文様十三回忌二付、白砂糖一箱来る。

受方摘要 中山氏、一円廿五銭。

十月三十日 辛卯 金曜 雨。

京都御寺御所より松茸、しめし着。美濃青木氏より松茸一籠着。米倉千賀子より柿一箱着。

朝、日光より電報にて、午下二時上野着。三時前、愛治郎始四人共無事帰着す。紅葉の大枝持帰りたり。日光は真盛りハ少し過たりといふ。松平頼聡君初七日招かる。御断申す。

むし菓子一折備える。訃音、横浜井上市兵衛、午前一時何分死去。明三十一日葬式。

*しめし (占地) *備える (供える)

十月三十一日 壬辰 土曜 雨。

書をよす、みの青木氏え返書す、入間米倉氏え返書す、愛国婦人会承諾返書す、原田二郎氏え短冊五枚、小包にて出す。横浜井上氏え使出す。香料金五円。

*みの (美濃)

(十一月)

十一月一日 癸巳 日曜 雨。

朝九時より、余、桃と同じく、観世会に行。帰途、雨晴、月よし。

十一月二日 甲午 月曜 晴。

朝七時四十分新橋汽車にて、余、桃子と同じく、鎌倉御用邸に参る。良子様も追々と御壮健に成らせられ、先々安心候。天皇陛下、横須賀軍艦進水式二付、行幸。鎌倉十一時十五分御通過二付、停車場迄奉迎す。御二度済て、うしろの御山え登り、眺望絶景、日本第一の好天気、又還行も押し奉りたり。四時四十分汽車にて帰る。本日、後の月見かまくらの月、殊に光あり。汽車にて月見ながら帰る途中、

山もゆき川ゆき野ゆき里ゆきて海の上広き秋のよの月

払方摘要 汽車代、一円八十銭。買もの、一円。

*還行 (還幸)

十一月三日 乙未 火曜 天長節。晴。

朝、生徒一同運動場にて君か代三度唱歌となへて天皇陛下万歳を祝す。午下早々江副氏を訪問して帰。外務大臣の招きを得て、余、栄子と同しく、帝国ホテルに夜会の興に逢ふ。今年ハ御庭の装飾にて、すへて紅葉に菊の造り花なり。十一時舞踏はしまり、十二時食堂開きたり。食事済て帰る。一時也。月尤も清光。

*外務(太(ママ))臣

十一月四日 丙申 水曜 晴。

(コノ日、記事ナシ)

十一月五日 丁酉 木曜 晴、午下二時頃、一寸雨ふりて直にやむ。
来客、志賀氏ノ講話あり。

十一月六日 戊戌 金曜 晴。

鈴木泰子、樽柿一樽。来客、榎津恂、支那人同道。

十一月七日 己亥 土曜 陰。

井深氏より花瓶箱入。小泉竹子、樽かき。佐々木高行、半切一ペ。田村氏、半襟、襟巻。書をよす、京都大聖寺。同、故藤井氏追悼会欠席、帝国大学え。此夜、風邪氣にてせき出、夜寐くるしくて、夜をあかす。

十一月八日 庚子 日曜 雨。

愛国婦人会、川崎大師にて川崎支部の発会式ニ總裁閑院妃殿下御台臨ニ付、従行之筈、とても不参ニ付、欠席断申。午下四時頃、気分よろしく相成ニ付、三井氏え行、梅ヶ枝謡て帰。

十一月九日 辛丑 月曜 晴。

(コノ日、記事ナシ)

十一月十日 壬寅 火曜 晴。

保修生、大宮え修学旅行を催し、上野八時何分之汽車に乗して行。此行廿人也。九時何分之着、八重垣二行。此公園也、紅葉も沢山ありて至極妙也。昼弁当を命して、皆塩田之城跡なる塩田山、みぬま川辺を散歩して、はぜの紅葉、秋草、りんどうなど咲残りたるを折て、此山え赤毛とうをしきならへて、弁当をつかふ。眺望も広く、趣味多く、先此模様を写生す。又八重垣に帰り、団轡興をつくして、三時何分の汽車にて面白く帰宅す。時、五時日暮也。

*保修生(補修生) *みぬま(見沼) *はぜ(櫨) *毛とう(ゲット) *団轡(団

變)

十一月十一日 癸卯 水曜 晴。
天皇陛下、姫路大演習地へ行幸、御発輦あらせられる。

十一月十二日 甲辰 木曜 晴。

(コノ日、記事ナシ)

十一月十三日 乙巳 金曜 晴。

午下早々愛治郎と同道にて新宿石山家二行、御料地植物御苑拝観する。是迄とはすへて御苑模様御改良ニ相成、鴨場も御庭になりて、優美に日本禁苑の風致あり。紅葉染尽して見事也。広き事、先東京第一と申す。散歩して二時間かゝる。夕陽紅葉に映して、錦繡万木之間に、白鶴、雁、其外種々の鳥遊ふさま、日本画の如し。夕景、石山氏にて晚餐を饗せられて、已而帰。

十一月十四日 丙午 土曜 晴。

姉小路良子様、鎌倉より新橋四時御着ニ付、御迎ひに行。御機嫌よう御上りに相成候。斎藤仁子よりはちや柿、蒸羊羹二籠着。

*はちや柿(蜂屋柿)

十一月十五日 丁未 日曜 晴。庭園の盆梅、はしめて花さく。

朝十時より閑院宮様え詣し、青山え行、日暮帰宅す。

十一月十六日 戊申 月曜 晴。

万里小路八重子七回忌法事ニ付、香料千疋を備る。鳥羽細工師片庭奇巖来る。来客、細川里子、其御子と同道にて、入学願に御出になる。

弘方摘要 万里家え千疋。

*備る(供る)

十一月十七日 己酉 火曜 晴。

陛下、大演習地より還行成る。午下、駒女来りて植物園に行。紅葉染なして秋の景色を呈せり。逍遙して帰る。北海道吉田氏より檜着、大箱。来客、夜万里通房様御出にて、十時帰らせられる。

*還行(還幸)

*逍遙(逍遙)

*檜(檜子)

十一月十八日 庚戌 水曜 雨、四時頃より雨晴たり。

早起。雨ながら散歩して帰。来客、石山基頭。橋岡、昨夜京都より帰る。
弘方摘要 金三十円、預ケル。

(十一月十九日〜二十二日、記載ナシ)

十一月二十三日 乙卯 月曜

新嘗祭。書をよす、吉田民治、山口梅、稲垣銑子。

(十一月二十四日〜二十六日、記載ナシ)

十一月二十七日 己未 金曜 晴。

午下、浅草本願寺に参詣する。五時帰。

弘方摘要 浅草婦人会会費本年分、三円六十銭。御講志、一円。

十一月二十八日 庚申 土曜 晴、昨夜より大雨、今朝十時頃より晴たり。

午下早々、余、桃子、観世素謡会二行、四時帰。

弘方摘要 会費、五十銭。観世え一円。

十一月二十九日 辛酉 日曜 晴。

上野音楽学校奏楽堂に於テ、辻新次氏書籍館補助公益音乐会二行、四時帰。

(十一月三十日、記載ナシ)

(十二月)

十二月一日 癸亥 火曜 雨、大雨やむ時なくふりしきる。

姉小路千代滝十三回忌ニ付、光明寺にて法事営まれ、参詣する。榊一对二円也を供ス。御
霊前え三円香料備える。姉小路え参る。日暮帰。

*備える(供える)

十二月二日 甲子 水曜 晴。

(コノ日、記事ナシ)

十二月三日 乙丑 木曜 晴。

(コノ日、記事ナシ)

十二月四日 丙寅 金曜 晴、氷始て結ふ。
姉小路え大食官御祭典二付、参詣して帰。橋岡来る。観世よりきぬた免状持参る、余と桃子え。

*大食官(大織冠) *きぬた(砵)

十二月五日 丁卯 土曜 晴。

(コノ日、記事ナシ)

十二月六日 戊辰 日曜 晴。

朝八時より、余、桃子同道にて、靖国神社内能楽堂にて五派之式能見物する。九条様より御誘引なり。四時済て帰る。

十二月七日 己巳 月曜 晴。

生徒試筆画の教授はしまる。

弘方摘要 羽衣肩懸、片庭え八円。

十二月八日 庚午 火曜 陰、少しあられふる、雨も少しふる。

九条家二行、日暮帰。橋岡来る。

*あられ(霰)

十二月九日 辛未 水曜 晴。

(コノ日、記事ナシ)

十二月十日 壬申 木曜 晴。

書をよす、山口梅子え小包物出す。来客、吉村滋子。落合直文大病二付、見舞を遣す。帝国議会開会式執行。

寺野氏より白紋羽二重一反。

十二月十一日 癸酉 金曜 晴。

教授畢る。余、桃子、散歩して、氷川田圃辺より巢鴨辺迄逍遙して枯野の景色見て帰。昨日、議会勅語奉答文、議長河野広中举行二付、衆議院解散。世はかくなくてはかなはぬ、おもしろし。

弘方摘要 観世えきぬた許の挨拶、五円。

*きぬた(砵)

十二月十二日 甲戌 土曜 晴。
大坂美尾野忠兵衛え鮭二尾贈る。京都木田氏えするめ贈る。

十二月十三日 乙亥 日曜 晴。
塾生一同、琴の温習会執行する。余、正子と観世会二行、四時帰。
弘方摘要 弁当代、七十錢。

十二月十四日 丙子 月曜 晴。
訃音、上野朔郎妻栄子昨十三日死去のしらせにて、課業畢而上野氏え行、弔詞を伸て、玉串金千疋備える。帰途、三条家を訪ふ。治子様御目もしして、篤子様御縁段之義申出る。日暮帰宅。

*備える(供える) *縁段(縁談) *義(儀)

十二月十五日 丁丑 火曜 晴、夕景雨になりたり。
朝墓参して帰。来客、木田氏、閑院宮家令、江副熊子、静子。夜、万里伯。林外浪結婚祝として、白紋羽二重一反を贈る。
田村氏より紋織一反。

十二月十六日 戊寅 水曜 雨、午下四時頃より雨晴たり。
訃音、柴田梅子来ル十三日死去のよし、美濃遠藤氏より知らせあり。同、落合直文死去。来客、支那人浙江瑞安孫任公使、亡国遺民として涙を流して国家をうれひたり。瀬津恂同道。弔詞、遠藤え出す。端書、大坂美尾野え。書至、後藤陽子。

*来ル(去ル)

十二月十七日 己卯 木曜 晴。
志賀氏講話アリ。来客、石山吉子。昨日落合死去二付、愛治郎悔みに行。香料三円を備える。

原氏より紋織二反。戸田氏より糸織一反。

受方摘要 毛利氏、七円五十錢。

*備える(供える)

十二月十八日 庚辰 金曜 晴。
来客、芝崎細君、橋岡氏。

十二月十九日 辛巳 土曜 晴。
午下四時半より観世夜能に行。愛治郎、桃子同道。落合直文、明廿日葬式二付、旧生徒十

人より根付榊一对、校友会より金十円備える。

十二月二十日 壬午 日曜 晴。

午下二時より三井得右衛門氏に行、素謡納会。夜に入、八時過帰。来客、中村田鶴子、安田暉子、赤池政子兄。

受方摘要 斎藤梅、十円。御所御局五人より十五円。安田暉、五円。

十二月二十一日 癸未 月曜 晴。三十三度。

補習生一同より、わか教員一同廿人昼餐を饗す。盛なる馳走、菓子も不残生徒の手に成りたるものにて、一同満足する。夜、万里通房来。来客、松永氏、波多野すま子、母同道。波多の氏、糸織一反。

受方摘要 浅野時子、千疋。上杉氏、一円。堀田氏、五円。

*わか(我が) *波多の氏(波多野氏)

十二月二十二日 甲申 火曜 晴、朝霜雪の如し、樹木につもりたり。三十度。

宇都宮多歌子、今日より教員やとひを解ル。生徒一同にも誥別する。午下、墓参して帰。

受方摘要 閑院宮様、三十円。同恭宮様、十円。

*やとひ(雇ひ)

十二月二十三日 乙酉 水曜 晴。

午下六時より塾生一同忘年会。第四教場を退装会演劇場とス。第七番アリ。第六教場立食場、御しるこ、御でん、みかん。大く賑々しく、年々培々盛也。九時全畢。

*退装会(仮装会) *培々(倍々)

十二月二十四日 丙戌 木曜 晴。

この日を以て教授納めをなす。遊戯場にて生徒一同いと間を告ぐ。

受方摘要 園祥子、三円。西村喜三郎、二円。太田房子、五円。

*いと間(暇)

十二月二十五日 丁亥 金曜 晴。

朝より塾生続々帰省す。

受方摘要 三条家、十円。田中久子、五円。岡本三輪、五円。

十二月二十六日 戊子 土曜 晴。

朝より歳末に廻る。姉小路家、重威、田中健三郎氏、閑院様、三条様、其外所々え行、日暮帰。

十二月二十七日 己丑 日曜 晴。
奥の掃除日なり。わか居間も掃除する。
*わか(我が)

十二月二十八日 庚寅 月曜 晴。
午下、余、桃子と買ものに行。京橋辺迄行、白木や、所々にもとめ物して、清水氏え寄、休足して帰。退校、植竹政子。
受方摘要 岩佐千賀、五円。

十二月二十九日 辛卯 火曜 雨。
来客、小松宮様二十三年間勤務いたしたる老女富沢糸島、此度宮家御暇に成りたるよしにて、暇乞御礼に来る。
受方摘要 博文館、四円。酒井藤、一円廿五銭。糸島より五円。

(十二月三十日、三十一日、記載ナシ)

(明治三十六年会計)

(二月)

二日	\ 祝義、金二円、車夫え	*祝義(祝儀)
同日	午前より終日、下総や	
三日	三井え行、同	
十日	金老円八十銭、印紙代	
十一日	井皿子三井行、午後より九時帰、車や	*井皿子(伊皿子)
十二日	酒井家行、四時より六時迄、同	
十六日	御所え参、くるま	
十七日	夜能二行、同	
十八日	能楽二行、同	
廿四日	観世行	
廿五日	北白川宮様え行	

(挿入紙)

36年 摘要

桜印十一月分

11月1日	安ハ屋払	11	銭0厘	
同	洋食	12	銭0厘	
同	芋センベイ	85	銭0厘	
同	小包	10	銭0厘	
5日	反物	400	銭0厘	
6日	小包	40	銭0厘	
同	カスリ一反	95	銭0厘	
7日	各家列伝	300	銭0厘	
同	大官行費	1050	銭0厘	
12日	菓子	200	銭0厘	
13日	研植画誌	20	銭0	
14日	按摩二回分	30	銭0厘	
同	山買物	13	銭0厘	
21日	婦人会費九ヶ月分迄	2050	銭0厘	
同	帝国教育会	100	銭0厘	
同	小包	10	銭0厘	
25日	美術教会	50	銭0厘	*美術教会(美術協会)
26日	三井払	4075	銭0厘	
同日	津田屋払	4040	銭0厘	
30日	ヒ布ノ紐	40	銭0厘	*ヒ布(被布)
30日	読売新聞代	33	銭0厘	
30日	下総屋払	7063	銭0厘	34087(ママ)銭0厘